

観察のまど 子どものにわ (5)

砂上史子

あの子の隣に座りたい
— 仲間関係と席取り —

仲間関係の深まりと一緒に
行動すること

幼稚園や保育所では、三歳ころからしだいに、特定の相手を「友達」として意識し、仲間関係ができてくると、その子と一緒に行動したいという思いを表現するようになります。

子どもが友達と一緒に行動したいという思いがはっきりと表れる場面として、お弁当や帰りの集まりなどで椅子に座る場面があります。

帰りの集まりの席とり行動

図1は、三歳児クラス十月の降園前の場面です。このクラスでは円を描くように椅子を並べます。どの椅子に座るか子ども自身に任されています。子どもたちは自分の好きな場所に椅子を持ってきたり、すでに並べてある椅子の中から座りたい場所を選んだりします。仲間関係が深まると共に、自分の好きな子の隣の席に座りたいというこだわりを表す子どもが増えてきます。

図1では、K君がY君に、隣に座ってもらいたくてずっと呼んでいた、I君がMちゃんの隣に座

りたいと言っていたり、Sちゃんの隣の席をめぐって、JちゃんとOちゃんがジャンケンをしたりする姿が見られます。保育室に戻ってこないAちゃんを、Sちゃんが先生と一緒に園庭へ探しに行く

と、隣にいたZちゃんとOちゃんは空いたSちゃんの椅子に足をのせて取られないようにします。

こうした「好きな子の隣」をめぐるさまざまなやりとりが、片付けから帰りの集まりが始まるまでの間に繰り返されています。図1に見られる子どもたちの姿からは「好きな子の隣」の席が特別な意味合いをもっていることがうかがえます。

「隣」の席の特別な魅力

幼稚園のお弁当時間の席取り行動を観察した研究^注(外山、一九九八年)では、友達と一緒に座る場合、対面や斜めの位置関係よりも隣や直角に並ぶ位置関係を好むこ

お弁当時間とは異なり、テーブルがなく、椅子を並べて座る場面ですが、お弁当時間と同様に、子どもたちの間に「隣」に対するこだわりが表れています。

とが明らかにされています。その理由としては、隣同士のほうがほかの位置関係よりも、身体接触が生じやすいこと、隣に座ることが仲良しの象徴となることなどが指摘されています。隣同士に座ることで、子どもの中に身体接触などを含めたやりとりが頻繁に生じ、そのやりとりが、さらに仲間関係を強めると考えられます。図1は

このような特定の相手の隣に座りたいと主張し、時に必死でその場所を確保しようとする子どもたちの姿に触れると、子どもにとつて仲間関係とは、「身体的な関係」であることがわかります。お互いの身体と身体の距離の近さと、その位置という物理的な事柄が、仲良しであるという心情の支えとなつているといえます。別の言い方をすれば、近い距離に身を置くこと、触れ合うこと、視線を同じ方

向に重ねることといった身体的行為が、子どもの仲間関係（友達であること）の営みそのものなのではないでしょうか。

「隣」に座れない時もある

図1では、H君はK君の隣に座りたかったのですが座れず、大きな声で自分の思いを主張しています。先生が提案した実習生のひざの上に座ることを嫌がる様子からも、H君がどうしてもK君の隣に座りたかったことが伝わってきます。また、MちゃんとI君の間にAちゃんがやってくると、Mちゃんの隣がよかったI君は怒って泣き出し、すねた様子でMちゃんの

後ろに座ります。

好きな子の隣の席は、座った順番や椅子を並べた順番によって決まり、後から別の子が入ってくることもあるため、好きな子の隣に座れないこともたびたび生じます。結局、図1のこの日は、H君もI君も好きな子（I君、Mちゃん）の隣に座ることはできませんでした。

「隣」に座れなかった時の 保育者のかかわり

好きな子の隣に座れなかった子に対して、先生は、子どもの気持ちを受け止め、実習生に抱っこしてもらおうことなど、好きな子の隣

に代わる別の席を提案したりしますが、子どもの気持ちはそう簡単には収まるものではないようです。

I君もH君も帰る直前まで気持ちが収まらない様子でした。そんなI君の様子を見て、先生は「みんな見てー、I君（H君）我慢したお顔」「いっぱい我慢して、お返事できません」とほかの子どもに伝えていきます。I君とH君の姿を、「いっぱい我慢」している姿として認めてあげる言葉かけは、思いがかなえられなかった悔しさを感じているI君、H君自身の気持ちをほぐす働きがあったように思います。

同時に、この言葉かけは、みんなと同じ場において悔しい思い、悲しい思いをしている子どもたちの気持ちを、ほかの子どもに伝えていたのではないだろうか。この言葉かけをきっかけにして、AちゃんがI君に席を代わってあげると言う姿が見られるように、ちよつとした保育者の投げかけによって、相手を思いやる行動が生じるところに、子どもたちが共に生活することの意味があるように思います。また、この先生の言葉かけが「I君、H君にお隣の席を譲ってあげて」というふうには、ほかの子どもに指示をするのではなく、I君、H君の状態を伝える（だけの）内

容である点に注目したいと思えます。H君、I君の状態をほかの子どもに伝えるにとどめることで、ほかの子どもたちが自分なりにH君、I君の気持ちを想像したり、自分からこうしてあげたいと行動したりする余白が残されている点

が、重要といえるでしょう。

こだわりを育ちとして

読み取る

この日の観察の後、観察者と保育を振り返って話す中で、先生は「H君がお帰りの時に、I君の隣がいいと強く主張したことはいいことだと思う。今までそういうことがなかったのです。こだわりが出

てきた」と語りました。このような読み取りは、席取りをめぐる子どもの葛藤（その葛藤がその場で必ずしも解決されない場合があることも受けとめた上で）を先生がいてねいに扱うことにつながっていると感じました。

また、その一方で、好きな子ども（近く）に座ることにこだわることに対して、先生からいつもとは違う席の決め方を提案することもあります。

「今日はスペシャルデー」

図1とは別の四歳児のクラスで、三学期になり仲間関係が深まると共に、お弁当の席をめぐる

「○○君はいいけど、△△君はだめ」などのやりとりが見られたり、片付けの時間から早々と一緒に座りたい子の椅子を探したりする姿が見られた時期のことでした。先生は子どもたちに「今日はスペシャルデーなので、クジを取って同じ色の机のところに座るのよ」「今日のお片付け見てちょうつと心配だったのよ」「みんな、お椅子ばつかり持って、誰と座りたい、ばつかり」と話し、五色の色画用紙のくじびきによる席決めを提案しました。くじびきで同じ色画用紙を取った子どもたちが同じテーブルに座るやり方です。くじびきにどきどきしな

ら、いつもと違うくじびきでの席決めを、子どもは楽しんでたように記憶しています。

このように、時に違う席取りの仕方や、いつもの仲間関係とは異なる人とかかわりの機会を投げかけることも、また、保育には必要なのだと思います。

席をめぐって子どものこだわりを大切にすること、保育者が変化を投げかけたり、提案したりすることとのバランスは、子どもの姿や仲間関係、クラスの状態に応じて、総合的に判断されるのでしよう。より具体的には、子どもが園生活に慣れ、情緒が安定しているか、自分を主張できている

か、特定の相手を求める気持が芽生えているか、仲間関係の経験が深まっているかなど、さまざまな子どもにかかわる先生の読み取りがあるといえます。

席取りの場面は、活動から活動の間、時間になると早ければ十分もかかりませんが、そこに交錯する子どもたちの思いと先生のかかわりに保育の奥深さを感じます。

(千葉大学教育学部准教授)

注 外山紀子「保育園の食事場面に
おける幼児の席とり行動」

発達心理学研究九(三三)

二〇九—二〇頁 一九九八年